

# 支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.2

私は、ご助と申します。

旦那様の支援様とともに市民家に参ってから半世紀以上になります。

先程から旦那様が、援姫様との出会いから今日までの、私らが働きを話されておりましたが、お分かりになりましたかな？

私は、ここ市民家にお仕えできたことを誇りにしております。三代のご当主様にお仕えし、<sup>つつが</sup>恙なくお勤めを果たしてまいりました。



殿様からも永のお勤めを誉められ感謝状を賜り、月の給金も一両扶持（意：約8万円か？）まで頂けるようになりもうした。

旦那（支援）様は貯金しなさいとおおせになるが、待つ者もおらぬ身、日々の楽しみは何といっても甘酒を飲みながらくゆ燻らす煙草でござる。

そして5年ほど前、援姫様と出会うたのでござる。

旦那様が姫様のいたずら悪戯には手を焼いておるとおおせですが、私も常々そう思っております。

「ご助、姫様がそっちに行かれたぞ。」や「ご助、姫様がお呼びじゃ。」とか「ご助、姫様のお相手代わってくれ。」と、旦那様はなんどきでもお声を掛けてこられるが、私にもお勤めがありまして、ご返事できないことも多々ありまする。

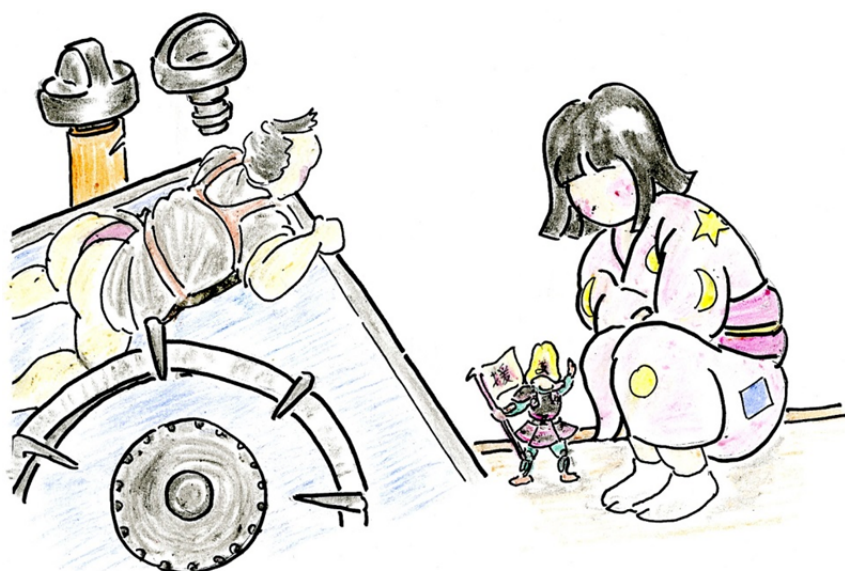
また姫様からは「ぼすけ、ぼすけ」と呼ばれ、嫌ではありましたが、それでも姫様が幼いころは、まあ仕方あるまいと「ぼすけ」の呼びかけに「へーい」とお答えしておりましたものの、もう年長さんにおなりになるに、未だに「ぼすけ」は流石に無かろうとぞんじ、然れば今年4月からは「ぼすけ」と呼ばれても返事いたさぬことと決めておりもうした。





そんなとき、あれは5月23日の午後2時頃でしたかな、いつものように旦那様が姫様とともに私を探しに参りましてな。

私は旦那様から任された市民家のガスパ点検という大切なお役目に就いておりました、遠くから姫様の「ぼすけ、どこちゃ」という声が聞こえてはおりましたが、かねて（意：先に）決めたとおり、お答えはせずその場に身を隠したのでござる。



その途端、強い玉葱臭が鼻を突いてまいりましたな、何かな？と思いながらも、じっと我慢しておりますところへ旦那様の「姫様、ガスの臭いが、危のうござる。」と姫様を制止する声をお聞きしたのです。

姫様の「許せ。わらわじゃ・・すまん。屁じゃ。」とのお声が続きまして、なる

ほど先からの玉葱のような強い臭いの正体に合点し、主家の姫様ではあられませんが、何ともすごい屁をなされるものよと驚きながら、次第に強さを増す臭いの中で不覚にも気を失いましてござりまする。

やがて旦那様に頬をはたかれ、目を覚ましますと旦那様が恵比寿様のような笑顔で

「ご助、ようやった。身の危険をも顧みず、ガス漏れをよう知らせた。」とおっしゃり、

姫様が「ぼすけ、ちえんが忠義者のぼすけに褒美をと申す。にゃにか要るか？」

とお聞きなされますので「それでは・・・甘酒を」と無意識のうちにお答えしておりました。



姫様から甘酒をなみなみと注いだ右大臣様の酒徳利を頂きましたときの喜びは生涯忘れえぬものではありましたが、その夜半に何が起きたかは、旦那様のお話してご承知のことと存じます。

市民家の番小屋焼失は、ご助一生の不覚。幸いにも殿様のおん査定と寛大なお取り計らいにより大きなお咎めはなく、また、殿様には、姫様が消防署に通報なされましたのが、旦那様とのお遊びのなかからはぐくまれたものともお認め下されまして、本来であれば主家である市民家から他家への改易が相当のところ、殿様からのお叱りさたやで沙汰止み（意：終わる）となりもうした。

ただ旦那様は、城下でご活躍の全ての支援さまが集う総会で、随分と肩身の狭い思いをなされたようで申し訳なく思っております。

私の方はともうしますと、旦那様よりも姫様のごかめい御下命（意：命令）を重んじなければならぬ有様となり「ぼすけ、ぼすけ」と呼ばれるのにも慣れ、最近では、こころなしか快感となり始めておりましたが、私も支援様の間でございませば、少しでも火災の危険があれば、たとえ姫様ともうしましても、毅然と物申す覚悟ではございました。

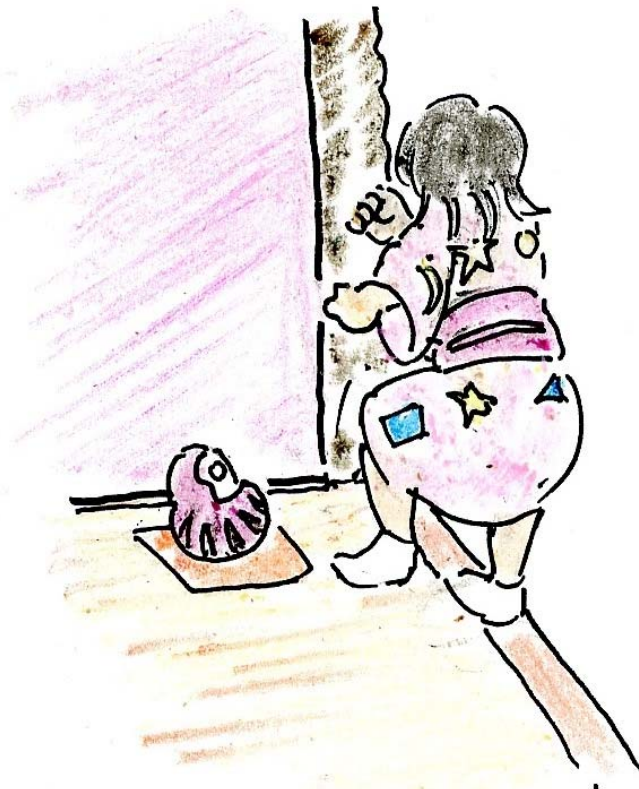
が、あれは6月30日のことでしたか姫様が

「ぼすけ、去年、ちやいがわ（犀川）で見た花火は綺麗じゃったのお。えんは花火が見たい。」

とおおせられたことがございました。

私が「7月下旬までお待ちください。」と申しあげましたところ

「嫌じゃ、嫌じゃ、えんは花火が見たい。」と床の間に上がり駄々をこねまらせる始末。





その時は、姫様のことで旦那様にこれ以上ご心配を掛けたくないとの一心で、私は旦那様が、いざ鎌倉（意：一大事）のときにと大切に蓄えられておいでた火縄銃の火薬を持ち出し、玄関に撒くと火打石を切りましたのでござります。

「ポオオンッ」と大きな火の手があがり、爆風でよろける私を横目に見ながら姫様は、

「にゃんじゃポッて？えんがみたいのはもっと大きい花火じゃ」と更に泣き叫ぶ有様。

いかんともしがたく、私はつい、

「ひ、姫様、大きな花火を買うにはお金がいりもうす。」とお声かけいたした次第。

お金などおもちにはならぬじやろうと、咄嗟に考えたのですが、姫様がすかさず

「いくらじゃ？」とお聞きなされましたので、私もつつい

「・・・2、いや3両」とお答えいたしましたところ

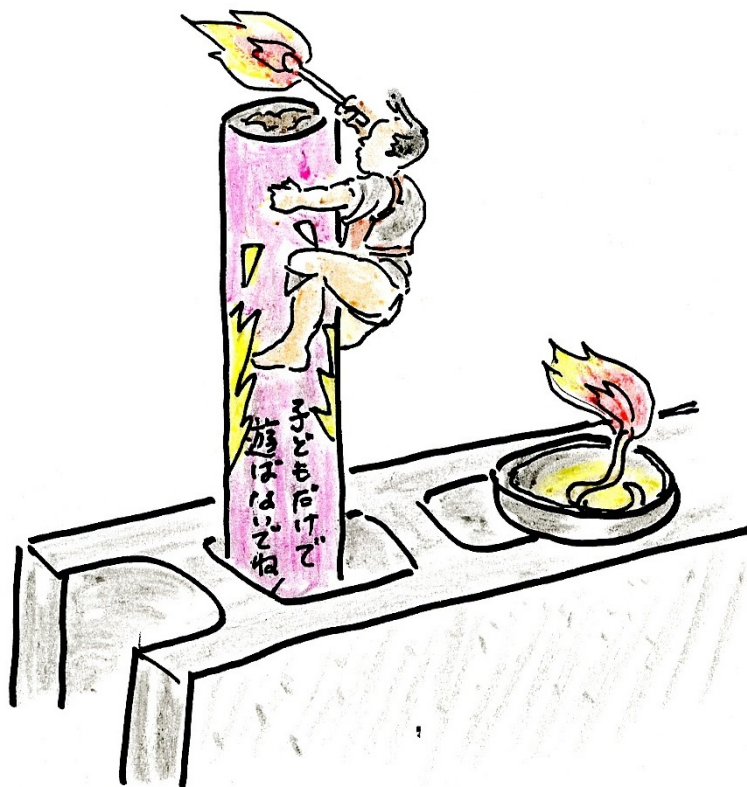
姫様は押し入れの中から取り出した紅鯛<sup>べんだい</sup>（意：正月の飾りもの）のお飾りの中から小判とおぼしき光物を4、5枚も切り取られると私にお渡し下され

「こりてよいか？」とおおせになられたのです。



もはやこれまで、主家の姫様が願いをお断りするのは不忠の極みと、私は縁  
日で賑わう尾山神社参道の屋台の中から花火を売っておる屋台を見つけると、  
持参した3両を紙幣や硬貨が入った籠に投げ入れ、大筒のような花火を3本抱  
えて姫様のもとへと帰ったのでございます。

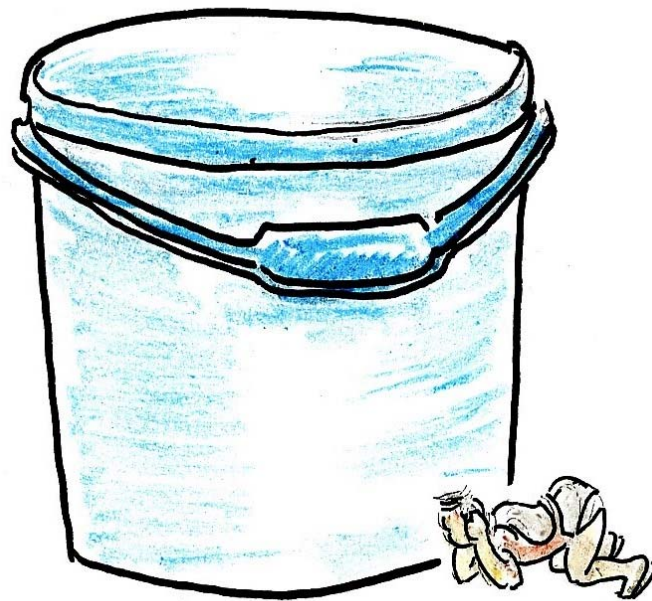
近づく低気圧のため、お屋敷のあたりは強い南風が吹き始めておりましたが、  
姫様の御所望と言い聞かせ、先刻誓った中間としての防火の覚悟もかなぐり捨  
て、地上に立てた1本の大筒花火へと火を付けたのでござりまする。



どおおおん どおおおん どおおおん とあたりに大音響が鳴り響いたかと思うと、<sup>かなた</sup>彼方上空からパラパラと火の粉が落ちてまいりました。

肝を潰し、体が凍り付いた私を尻目に姫様は「ちごい（凄いか?）、ちごい、次じゃ。」嬉々として残り 2 本の大筒に火をつけようと。

「あっ、危ない！」思うより早く、私の体はバケツの蔭へと滑り込んでおりました。



丁度その時、旦那様が駆けつけてこられたのです。

ここからは、物陰からみておりました姫様と旦那様とのやり取りをお話しさせていただきます。

「ご助！ご助！敵の大筒じゃ、姫を守れ。」駆け込んでこられた支援様の手には火縄銃が。

「ご助！火縄の火薬がないぞ。ご助どこじゃ。姫は無事か?!」支援様のお顔が不動明王様のように私は怖くて出てゆくことができませんでした。

その旦那様の背後で姫様が手に持った大筒に火が付き

どおおおん どおおおん どおおおん

どおおおん どおおおん どおおおん

と先ほどよりも大きな音が鳴り響き、旦那様の御身体は宙に舞ったのでございます。



「だ、旦那様っ！」私は心の中で大きく叫びましたが、両の脚はピクリとも動こうとはしませんでした。

旦那様が吹き飛んだことに気付かない姫様は

「あはは、あははは、どうじゃぼすけ、きれいじゃろ？」と歓声を挙げておいででした。



その時でございます。禁じ手の等身の術で4尺の武者姿となった旦那様が大筒の前に立ちはだかり、飛散する火花を全身で受けとめながら

「姫様、危のうござります。お止めなされませ。」と姫様をお諫めになられたの  
でございます。

旦那様のお姿にようやく気付かれた姫様は大筒を下すと、旦那様の装束がくすぶっているのをお認めになり

「ちえん、熱くにやかったか？」とお言葉を掛けられましてございます。

旦那様はご自身の装束の火の粉をお払いになりながら

「姫様、子供だけで大筒や花火などを扱ってはなりません。また、このような風の強い日などはもってのほかでござる。拙者は姫様をお守りするのがお役目、如何なる危険も厭いといませぬが、それには姫様もご協力していただかないと。姫様は拙者が消えても構いませぬのか？」となおも姫様を諫めるようにおっしゃられ、それに姫様は

「嫌じゃ。嫌じゃ。ちえんがいなくなったらえんは悲しい。もう花火はせぬから何処にも行ってはならぬぞ、ちえん。」とおっしゃられました。

その姫様のお言葉を聞き旦那様は

「では、これでしまいにしましょう。どれ、水を掛けてしっかりと消しましよ  
うぞ。」と私が隠れておったバケツを持ち上げたのでございます。

その姿を見られては大変と、バケツにしがみついた私は

「えいッ」旦那様の掛け声で水もろともに、まだくすぶっている大筒へと投げ  
込まれたのでございます。



大筒が消えたのを確認すると姫様と旦那様はお屋敷へと入って行かれながら

「のう、ちえん、ぼすけを見なんだか？」

「見ておりませぬ。拙者も先程から探しておりもうしましたが、この姫様の大事に、まことご助めは・・・」などと話されておいででした。

その晩のこと、泥と煤まみれで番小屋に戻った私に旦那様は

「なんじゃご助その姿は？ははは、まあ良い。今日、姫様は一つお利口になられた。ご助にも見せたかったぞ。それはそうと火縄の火薬を知らんか？」と上機嫌でお話しされたのでございます。

皆様をお願いでございます。この私のお話しは決して旦那様にも、もちろんお殿様にも内緒にしておいてください。

それと今一つ大事なお願いでござりまする。

大筒（花火）は子供だけでは決してしないこと。風の強い日は絶対にしないこと。最後はバケツの水でしっかり消したのを確認すること。

お願いできまするな！（つづく）